

<第 86 回 HSE セミナー 講演内容>

■テーマ：「地域包括ケアの実現に貢献する拠点型サ高住の機能と経営戦略」

■講師：五郎丸 徹 氏 （株式会社学研ココファン 代表取締役）

「病院は家ではない」とある在宅医師は言う。当然のことであるが、地域包括ケアに向けた根底にある考えが込められていると思う。2025 年に向けた課題の一つに「高齢者の戻る場所」の整備があげられている。ちょっとしたブームとなった「サ高住」が少し落ち着き、質と機能の見直しが始まっている。そこに新しい概念として「QOD (Quality of Dead)」がいま在宅医療業界で提唱されている。薬局としても今いちど、施設在宅で利用者に何が提供できるのかを考える必要があるのではないだろうか。薬局がただのお届けという作業になってしまうと、そこに付随する報酬への再検討が今後の議論として上がってくる。報酬を守ることも大事な任務である。

<講師紹介>

1991 年株式会社学習研究社入社。2003 年にウェルネス事業準備室に配属。2005 年に株式会社学研ココファンに出向し 2007 年に経営企画室に配属。2009 年には株式会社学研ナーシングサポート取締役に就任。株式会社学研メディカル秀潤社取締役を経て 2013 年株式会社学研ココファンに転籍し常務取締役に就任。現職は株式会社学研ココファンホールディングス取締役、株式会社学研ココファン代表取締役、株式会社学研ココファン・ナーシング代表取締役。

.....

■テーマ：「医療経済の立場から見た調剤薬局のありかた」

■講師：西村 周三 氏 （一般財団法人 医療経済研究機構 所長）

昨今、医薬分業のあり方が議論になっている。その大きなきっかけは「医薬分業は医療経済に貢献しているのだろうか」という疑問からではないだろうか。限られた財源の中で社会保障制度維持に向けた報酬の割り振りがされているが、もはや現状制度では限界といわざるを得ないのではないだろうか。保険薬局療養担当規則に定められた「社会保険制度の健全な運営に努める」という文言は、社会保障制度の維持のために我慢もしなくてはいけないと読むこともできる。今一度、医療という大きな枠組みの中にある薬局の存在を認識し、私たちに求められている努力へのきっかけを模索したい。求められている結果（エビデンス）を出さなくては報酬はついてこない。

<講師紹介>

1969 年京都大学経済学部卒業、72 年同大学院博士課程中退、88 年「医療の経済分析」で経済学博士。京都大学助教授、同教授（大学院教授）、副学長を経て京都大学定年退職。2010 年 10 月より 2014 年 3 月まで国立社会保障・人口問題研究所所長。医療経済学分野の日本における草分け的存在の一人であり、医療経済学会の初代会長を務めた。京都大学大学院名誉教授。

.....

■テーマ：「コンビニ 40 年の歴史から何を学ぶか 成長のエンジンは顧客起点の徹底」

■講師：飯田 展久 氏 （日経BP社 日経ビジネス 編集長）

薬局というビジネスの向かう先はどこにあるのだろうか。その答えのヒントが小売業界にある。町の酒屋、商店がコンビニエンスストアへと変わった、地域のスーパーがGMSへと変わっていった。地域の薬局が「処方せん薬局」へと変わっていった。新たなビジネスモデルの登場とともに、市場は拡大し大手チェーンが生まれた。いま多くの小売業界が陣取り合戦の最中である。これだけの市場になれば大きな流れに逆らうことができない。すでに薬局業界もその流れに取り込まれていることに気がついているだろうか。大企業の裏には商社がいる。商社と手を組むコンビニがいる。コンビニと手を組む薬局がある。5 万 8000 軒の薬局の占有率はどうなっていくのだろうか。他業種をベンチマークすることによって少し先の未来がみえる。

<講師紹介>

1987 年日本経済新聞社入社。大阪・社会部で記者人生をスタートし、東京・流通経済部で流通業界を広く担当する。インドネシア・ジャカルタ支局などを経てデスク・部長を務めたのち、2015 年 4 月に日経 BP に移り、現職。“読者目線”を考えた「思い切った企画」を数々と展開。2015 年 10 月には機動戦士ガンダムが日本経済にどのような役割を果たしたかを「ガンダム、日本再生計画」として特集。そのほか、性的マイノリティ「LGBT」を取り上げるなど幅広く問題提起を行っている。「過去・現在・未来」を読む経営情報メディアとして経営者に広く愛されている。